2013 年 12 月 5 日 ISSN 0916-9237

アメリカ学会会報

－The American Studies Newsletter－

No.183 December 2013

入試が変わる，高校世界史が変わる，アメリカ史が変わる

貴　堂　嘉　之

最近のニュースで，大学入試センター試験が 5 年後には廃止の可能性があると報じていた。少子化が進む日本にまもなく大学全入時代がやってくることが，こうした入試「改革」を加速させている。その一方で，グローバルな競争に勝ち抜くための学期制改革など大学間の生き残り競争も激しさを増し，この風雲急を告げる教育制度改編の動きに大学教員は当分の間振り回されそうである。

アメリカ学会でも，この時代にあった「アメリカの教え方」とはいかにあるべきかという問いを立て，2011 年から 3 年間にわたり討議を重ねてきた。今年の年次大会では，高校の歴史教科書や大学の入門授業における理想の「教科書」をテーマとし，私も登壇者として報告を行った。私は，5 年前から高校世界史 B の教科書作りに携わっているが，その新課程用教科書は今年完成した。今後も，そしておそらく大学をリタイアしたあとまで，この歴史教育にはライフワークとして取り組むことになるだろう。

高校世界史とは不思議な世界である。執筆陣は 10 名前後，うち西洋史は 3 名ほどで古代史 1 名，近現代はドイツ・フランス・イギリス史が占めており，アメリカ史が加わることはほとんどない。戦後 60 年以上にわたる社会科教育のなかで，日本の歴史学・西洋史学に築かれた見えざるヒエラルキーからか，この布陣はどの出版社でも同様である。かなり異例の事だと思うが，今回，私はアメリカ史以外に，遅塚忠躬先生が旧版で担当していたウィーン体制以降のヨーロッパ近代史の部分も担当させていただき，ついでに生物学的な人種定義を覆したくて，誰も書きたがらない序章「人類のはじまり」も担当したのだった。何事もチャレンジである。

でも，20 世紀は「アメリカの世紀」であり，近現代史におけるそのプレゼンスを考えれば，アメリカ史家がヨーロッパ近代を含む「革命の時代」,「世界大戦の時代」,「戦後世界」を書いてもよいのではないか。私は，それまでのヨーロッパ史家が描いたアメリカ史像とは一線を画し，例えば，1790 年帰化法から説き起こしてホワイトネス研究の成果を取り入れ，アジア系移民や黒人奴隷の社会史的叙述を増やし，ジェンダーの視座を重視してサリー・ヘミングスまで載せてしまった。

こうした新しい視座や人名を教科書に登場させるのは，それでなくても受験生に評判の悪い世界史でさらに暗記すべき用語を増やすだけではないかとの批判もあるだろう。しかし，奴隷制を人種だけでなく性の問題として解説することで，アメリカ史の奥深さを生徒は知ることになるはずだ。歴史家はまず歴史を好きになってもらうことを最優先に考えるべきで，瑣末な暗記を問うだけの私大の穴埋め入試は全廃すべきだし，国公立の論述問題でも古い教科書に縛られたつまらない作問は大いに反省すべきである。

世の中が「変わる」とき，単にその傍観者となるのか，「変える」側にまわって挑戦をしてみるか，私には俄然，後者が性に合っている。最近の若い院生・研究者を見ていて思うのは，「アメリカ」の冠がつく学会でばかり報告をして，西洋史や歴史学一般，ジェンダー系などの学会に出向いてあまり報告をしないことである。そうした他流試合をしてこそ鍛えられる部分があることを忘れてはならない。これからのアメリカ研究者は，「アメリカ」だけでなく，「近代」や「世界」の語り方を磨かなければならないし，方法論の観点からも「アメリカ史」を乗り越えてグローバル・ヒストリーの先にあるものを見つけないとならないはずだ。

最後に教科書作りに関して私の夢を語るならば，ゴチック体の暗記用語だらけの現行教科書とは全く違う，動画や音声史料でいっぱいのビジュアル満載の電子書籍としてアメリカ史の教科書を作ること。この分野はアメリカが最先端なので，私と同じように「変える」のが大好きで賛同してくれる人がいたならば，一緒に，教科書革命を起こしてみたいと思っている。

（一橋大学）

『アメリカ研究』第 49 号原稿募集

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は，2015 年 3 月に第 49 号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿を期待します。

1. 内　　容　アメリカ研究に関する未発表論文，もしくは進行中の研究ノート。前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は，本年度の投稿をご遠慮ください。また，同じ年度に，あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することは出来ません。これは，なるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚　　数　論文は 33 字×34 行のレイアウトで 19 ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で 8 ページ以内。ほかに英文レジュメ（500 語）。執筆要項は，学会ウェブサイト（http://www.jaas.gr.jp）を参照のこと。
3. 原稿締め切り期日　2014年 9 月 10 日（水）。学会事務に必着のこと。
4. 提　出　部　数　3 部（コピー）。提出原稿は不採用の場合もお返し致しません。

応募者は，論文題目に簡単な説明を付けて，2014 年 6 月末日までに電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で，年報編集委員会宛てにお申し込みください。採否は編集委員会の責任において審査決定致します。

『アメリカ研究』第 49 号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第 49 号の特集テーマは，「モンロー・ドクトリン再考」と決まりました。

「特集」に執筆希望の会員は，2014 年 6 月末日までに，氏名・所属，論文題目および構想・資料などの説明（400 字程度）を電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で，年報編集委員会宛てにお申し込みください。その際の Subject は，「『アメリカ研究』特集応募」と明記してくださるようお願いいたします。原稿については，学会ウェブサイト（http://www.jaas.gr.jp）上の執筆要項をご覧ください。締め切りは，9 月 10 日（水）必着です。

英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

英文ジャーナル 26 号への投稿について

学会英文ジャーナル 26 号（2015 年 6 月発行）へのご投稿を計画されている会員は，次のような日程になっています。

26 号の特集テーマは“Family”です。昨今ニュースでも話題になっている同性愛婚をはじめ，家庭内暴力，結婚，父母のイメージの変化，さらには孤児の問題や，共同体活動による家庭性変革の試みなどなど，さまざまな切り口からの投稿をお待ちしています。原稿応募申込み（論文要旨 300 語程度）の締め切りは 2014 年 1 月 23 日，原稿（8000 語程度，注含む）の締め切りは 2014 年 5 月 8 日です。要旨，論文ともに，送付先は，電子メール添付にて engjournal@jaas.gr.jp です。なお，『アメリカ研究』との二重投稿，あるいは日本語，英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

***The Japanese Journal of American Studies*—Call for Papers**

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 26th issue (June 2015) of the Japanese Journal of American Studies. Papers on any topic within the field of American Studies, including those related to this issue's special theme, "Family," are welcome.

As always, the coming issue will explore the theme from a wide range of disciplinary perspectives. In general, we welcome papers that shed light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economics, law, art and architecture, and uses of electronic communications media. For the coming issue, we would like especially to see papers on same-sex marriages, domestic violence, the various images of orphans in literature and other media, etc.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), are due by January 23, 2014, and should be sent to the JJAS Editorial Committee via email at engjournal@jaas.gr.jp as attached files. Completed manuscripts will be due May 8, 2014 (maximum 8000 words, including notes) and should also be sent to the above email address. Papers must be written in English, based on original research and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue. The JJAS style sheet can be obtained from the JAAS homepage (http: //www.jaas.gr.jp/english/).

英文ジャーナル編集委員会

新　刊　紹　介

横山佐紀著 著

『ナショナル・ポートレート・ギャラリー　その思想と歴史』

（三元社，2013 年，5,985 円）

筆者の研究室には，アメリカ歴代大統領の肖像が一面に並ぶプラスティック製の下敷き様のものが飾ってある。下敷き二枚分ほどの大きさに初代から時系列に大統領が並び，中央に第 35 代ケネディ大統領が大きく位置する。この製品を購入したのがボストンのケネディ大統領図書館兼博物館だからだ。裏面には歴代のファーストレディーの肖像が同様に並ぶ。折に触れてこれらの肖像を眺めては「この大統領は二人の女性と結婚したのか」などと他愛のないことを考えつつ，同時に「大統領」をずらりと並べて手元に置けるよう製品化するメンタリティにアメリカ（人）のアイデンティティの根幹に関わる何かがあるのではないか，とぼんやり感じていた。この言語化できずにいたものが，まさに本書の中心命題である。

アメリカ合衆国の歴史に貢献した人々の肖像（ポートレート）・彫像を文字通りずらりと展示するナショナル・ポートレート・ギャラリー（NPG）は，1968 年にワシントンで開館した。大統領ポートレートを中核とし，「ポートレートのコレクションによって国家のアイデンティティを表象する」ことが第一義とされる「歴史ミュージアム」である。著者があえて“ミュージアム”とカタカナ表記を使うように，それは美術館ではない。そこは収蔵されるポートレートの芸術的価値より，描かれた人物の米国史における重要性が優先されるような，極めて政治的な空間だ。愛国心と国家的アイデンティティの問題を初めから含むこの特異なミュージアムの成立史と運営を丹念に追いつつ，本書は結果的にアメリカ精神史を――いかにアメリカという国が精神的に形成されたかを，描き出している。

第一章は NPG が手本とした NPG ロンドン（1856 年開館）の成立過程を 19 世紀ナショナリズムの文脈から確認する。第二章はアメリカで 18 世紀から構想されてきた“ポートレートから成るギャラリー”の共和主義的源泉を辿る。後半第三・四章は NPG 設立のための実際の手続きと開館後の諸問題を，1950 年代から 911 を経るまでの歴史的ダイナミズムの中で捉える。「栄誉の殿堂ではない」とする NPG の理念――つまり英雄も犯罪者もコレクションに含むという原則は，冷戦や国内問題を抱えて国全体が愛国的に傾いた開館前夜の時代，いかに死守されたか。NPG ロンドンに倣いつつも，大統領ポートレートを特権化することで，いかにアメリカ独自の NPG が創出されたか。政府が文化政策に積極的でないアメリカで，公共ミュージアムにどれほど民間資金（プライベート・セクター）が絡み，ナショナルな歴史記述に影響を与えているか――。これら刺激的な問題設定と，堅実かつ鮮やかな解読の手並みは，時にスリリングでさえある。いかにアメリカの NPG を作り上げるかという問題は，とりもなおさず「アメリカとは何者か」を問うことである。アメリカに関わる全ての人の必読書であろう。

小笠原亜衣（玉川大学）

杉野健太郎 編

『交錯する映画――アニメ・映画・文学』

（ミネルヴァ書房，2013 年，4,410 円）

映画は，その誕生以来，演劇や小説などの様々な他のメディアと交錯してきた。映画黎明期の社会改良諸運動が盛んであったアメリカ社会において，排斥対象となった「低俗」な映画の社会的地位を向上させるために，アメリカ映画産業は「高級」な文学や演劇などのミディアムを活用し，中産階級にまで受け入れられる万人向けの「ハリウッド映画」を形成していった。それ以降も，古典的ハリウッド映画の文法が主流の時代がありながらも，様々なメディアとの 1 世紀以上にもわたる交通のもとで，映画が生成された。本書では，今まで映画学研究で看過されてきた様々なメディア（アニメ，文学など）との連関の視座から，その映画が交錯する様相またその情況下の映画の「重層的な意味と構造と歴史」を検討することが試みられている。

本書は，I 部「映画とアニメ」，II 部「映画と文学」，III 部「メディア，ジャンルと映画」の三部（全九章）から構成されている。I 部の板倉史明論文では，古典的ハリウッド映画の文脈を射程に入れながら日本の戦中・戦時アニメーションを映画学的な手法を用いて検討し，続く川勝麻里論文では，宮崎駿と手塚治虫のアニメーションと漫画の関係性を分析する。II 部において，トーマス・マンの言説・ドイツ映画を考察する山本佳樹論文は，ナショナル・アイデンティティの問題（ドイツ/アメリカ）を浮上させ，一方，杉野健太郎論文では，小説『グレート・ギャツビー』とその映画の構造を比較分析し，同時代のネーション，階級，ジェンダーの問題を照射させる。山口和彦論文では，「国民国家」（資本・国家・家族）や植民地主義の問題を射程に入れながら，インド系アメリカ人女性監督の映画『その名にちなんで』及び原作小説のディアスポラ表象について考察する。III 部において，塚田幸光論文では，ヘミングウェイ文学・映画・ジャーナルなど複数のメディアをスペイン内戦の歴史的文脈に接合することで，映画・映画コンテクストの多層的様相を描き出す。川本徹論文では，文学（エマソン）・写真・絵画との交錯の観点から 1960 年代の西部劇と SF 映画を分析し，時間・空間を縦横無尽に駆け巡りながら，自然と視線の問題を綿密に検討する。小野智恵論文では，ジャンルや音楽をてがかりとして，ロバート・アルトマンの作品における古典的ハリウッド映画とのずれが検討される。さらに，御園生涼子論文では，角川映画のメディア・ミックス戦略を再考する（読者は映画・ゲーム共通の視覚様式（3D など）の創出作業に取り組んでいるルーカスアーツ社などのアメリカのメディア・ミックス戦略と比較するかもしれない）。

このような各論者が様々なメディアの複雑な連関を検討する際に用いる多種多様なテーマや研究手法は，映画学における議論空間の広がりをもたらすであろう。また，映画学研究者にとどまらず，映画に興味を持つ人ならだれでも読み応えのある本書（初学者向けの映画用語集掲載）から映画史の重要な知見を獲得できるであろう。

梅本和弘（京都大学）

成田雅彦 著

『ホーソーンと孤児の時代――アメリカン・ルネサンスの精神史をめぐって』

（ミネルヴァ書房，2012 年，5,250 円）

本書は 19 世紀のアメリカを「孤児の時代」と位置付け，この時代の精神と結びついたアメリカン・ルネサンス文学が「孤児のまなざし」によって特徴づけられるとし，ホーソーン作品の「孤児」意識を精査する。

八章構成の本書は，序章「ホーソーンと孤児の精神史」でまず，イギリスという「父」を抹殺して独立を果たすと同時に，父性的権威の支柱であったピューリタニズムの伝統も退潮しつつあった 19 世紀のアメリカの時代精神を説明する。そして父性的権威の探究を行うこの時代の作家達こそがその「殺戮者であり創造者」であると説き，ホーソーンの「孤児」意識へと論が進められる。続く第 1 章「孤児の風景」は初期の 3 つの短編を扱い，登場人物達の個人的喪失感に「孤児の時代」の精神を読み解く。第 2 章「アメリカン・ロマンスという『空間』」は「税関」をとりあげ，ロマンスというジャンルを手掛ける作家の，「文学的想像力の中」に時代の言説を超える新たな「父親的権威を打ち立てる」試みを論じる。第 3 章「『緋文字』と「父親」の誕生」は，分裂を統合する「新しい父性的権威」の誕生を説く。第 4 章「『七破風の屋敷―モールの呪いと近代の神話』は，アメリカ社会の無意識的領域に封印された声を救いだすモールの役割を説く。第 5 章「詩的言語の理想郷―『ブライズデイル・ロマンス』論 I」は，セミオティックの概念を援用し，父性的権威への回帰によって打ち砕かれる，女性的想像力に依拠する詩的言語獲得の試みを論じる。第 6 章「ホーソーンと心霊主義―『ブライズデイル・ロマンス』論 II」は，19 世紀の社会改革や疑似科学の隆盛が，伝統的宗教の基盤崩壊がもたらした精神的孤児の不安と結びつくことを説く。第 7 章「カトリシズムの誘惑と救済―『大理石の牧神』をめぐって」は，カトリシズムに惹かれる作家が帰着する信仰的折り合いを論じる。

著者が「孤児」のテーマに初めて関心を抱いたのは博士論文執筆時で，本書は，序章と最終章が書き下ろし，他の章が 30 年以上にわたり著者が発表してきたものを加筆修正した論文という構成である。『ブライズデイル・ロマンス』の「孤児」意識を考察する第 6，7 章の議論が，統合的展開に及んでおらず多少物足りなさを感じるのは，こうした経緯によるのかもしれない。しかしそれよりも本書からひしひしと伝わってくるのは，主題に対する一貫した著者の関心である。「アナクロニズムという感を免れないかもしれない」と謙遜しつつ，著者は「個人の精神分析と宗教，そして文化批評を重ねる試みは，ホーソーン批評においてやはりもっとも正統的なアプローチの仕方なのではあるまいか」と主張する。精神や宗教に関わる主題を扱う著者の長年の研究が，自己矛盾せず本書に集約されているのは，著者が自身の琴線に触れる問題に深い洞察のまなざしを向けてきた所以であろう。そして今年度，日本ナサニエル・ホーソーン協会会長に就任した成田氏は，まさに本書が論じる世代交代に伴う新たな「父性的権威」創設の重責を感じておられるのではないだろうか。ホーソーン研究のありように一石を投じる本書は，著者が自身に向けた書のようにも思える。

中西佳世子（京都産業大学）

海老根静江 著

『総体としてのヘンリー・ジェイムズ――ジェイムズの小説とモダニティ』

（彩流社，2012 年，2,940 円）

近刊のアメリカ文学研究の論集で，斬新なヘンリー・ジェイムズ論が散見されるのは，ジェイムズ研究における新たな批評的アプローチの可能性の表れであろう。その中で，長年に亘るジェイムズ研究の集大成として著者が本書を上梓されたのは，時宜を得たものであり，また各論ではなく「総体として」ジェイムズを捉え包括した本書のような企図は，ジェイムズ研究者やアメリカ文学研究者が待ち望んでいたものである。

著者がフォークナーやバルザックと比較して論じているように，ジェイムズの各作品には完結性や独立性があるのは周知のことである。しかし，本書はその重層性や様々な関係性，いわば間テクスト性をレオ・ベルサーニやイヴ・K・セジウィックの理論を援用しながら前景化し，ジェイムズの「リアリズム小説」の構造を解き明かすのである。そこには，ジェイムズの著作だけではなく，同時代の欧米の作家や思想家の著作など，広汎な読書と知識に裏付けられた著者の文学観が浮かび上がってくる。とりわけ，欧米における「モダニティ」と，近代研究において重要な「セクシュアリティ」についての考察が本書で展開されたジェイムズ論の主軸となる切り口である。

七章から成る本書のほとんどが今回書き下ろされたものであり，なかでも第一章「模索するヘンリー・ジェイムズ」と第二章「『円熟期』小説の構造」にジェイムズ研究者/文学研究者としての著者の卓識が存分に発揮されており，それを巧みに補強するように後半の章が展開される。短編小説群を世紀転換期の文化現象やクイア批評の観点から読み解く第三章，バルザック，トルストイ，フローベール，プルーストといった，ジェイムズと同時代の作家たちとの関係性を論じる第四章などが続く。

第五章で詳述される，ジェイムズの創作論として有名な建築のメタファー「フィクション（小説）の家」は，著者のジェイムズ研究に対する視座に重なり，本書の核となる最初の二章ともリンクする。ジェイムズの小説を「家」に擬えるならば，そのいくつもの「窓」は小説の多様な形式を表す。著者はその「窓」を通して，小説の構造や登場人物の意識など，内部を「覗く」内向きのベクトルだけではなく，特に「円熟期」の小説論では，社会や文化，つまり外の世界とどのようにつながっているかを眺める外向きのベクトルを注視し，ジェイムズの「家」が外に開かれていることを主張する。そして，いくつもの「窓」から見える外の景色には，まさに様々なパラダイムが解体していく近代の胎動が立ち現われ，都市，資本主義，物質主義，セクシュアリティ，身体，主体，意識といったモダニティの諸要素が構築する，ジェイムズの「リアリズム小説」としての複雑で重層的な構造が逆照射されるのである。それがもっとも効果的に，しかも複雑な文学テクストとして構築されたのが，著者が「究極の一作」と評価する『黄金の盃』であるという。ジェイムズの小説を「モダニティ」の文脈で相対化しつつ，「総体としての」ジェイムズの不可視性を逆説的に示唆しているようにも思われる。本書はジェイムズ研究の広がりと豊かさを巨視的に提示してくれる啓発的な書である。

石塚　則子（同志社大学）

高野一良 著

『アメリカン・フロンティアの原風景——西部劇・先住民・奴隷制・科学・宗教』

（風濤社，2013 年，2,625 円）

メイン・タイトルの一部をなす「フロンティア」の一語から推測されるかもしれない，フレデリック・ジャクソン・ターナーの学説の紹介やそれをめぐる議論は，本書では最低限に切り詰められている。代わりに著者が調査探究しようというのは「フロンティアをめぐる歴史物語」。その中でも「有名人やメジャーな出来事」ではなく，多種多様の「マイナーな個人や出来事」を前景化することに力点が置かれている。分かりやすい例を挙げるなら，かの「ワイルド・ウェスト」ショーを創始したバッファロー・ビルや，それに出演したシッティング・ブルよりも，知名度という点ではやや劣る，「インディアン・ギャラリー」を開設したジョージ・カトリンや，彼が肖像画を描いたブラック・ホークが大々的に取り上げられている（第 2 章の後半と第 3 章）。狭い意味での学問よりも，日々の生活の場，とりわけ忘却の波にさらされた場を注視することで，はじめて顕在化するフロンティアの姿。そこに著者の一貫した関心が注がれていることを，読者は何よりもまず肝に銘じる必要がある。

本書のサブ・タイトルには 5 つのキーワードが掲げられているが，著者の歴史観が明快に綴られた第 1 章につづく 5 つのチャプター（その原型は 1995 年から 2006 年までに発表された諸論考）が，キーワードのひとつひとつに対応するわけではないことに，注意を喚起しておきたい。簡単に整理するなら，5 つのキーワードの内，「西部劇」はモニュメント・ヴァレーの風景の特質，映画内での人間ドラマとの関わり合いを考究する第 2 章の前半に，「科学」はロジャー・ウィリアムズ，ウィリアム・ウッド，トマス・ジェファソンらの人種をめぐる博物学的言説によってピューリタニズムを相対化する第 4 章に，そして「奴隷制」と「宗教」は，ピーター・カートライト，チャールズ・グランディソン・フィニー，ウィリアム・エラリー・チャニングら宗教人の反奴隷制言説の通弊を暴く第 6 章に，それぞれ該当する。残る「先住民」はほぼ全章を横断する本書最大のキーワードと言えるのだが，サブ・タイトルには掲げられていないものの，「先住民」と同様の重要性を備えたキーワードとして，いま注目を促したいのは「女性」である。とりわけ 2 人の女性作家のテクストが脚光を浴びていること，すなわちキャサリン・マリア・セジウィックの歴史小説『ホープ・レスリー』の文学的意義が第 5 章で精査され，またマーガレット・フラーの旅行記『五大湖の夏』（著者自身の手になる邦訳は 2011 年に未知谷より刊行）が第 3 章を中心に本書の随所で論及されていることは，特筆に値しよう。実際のところ，第 6 章において著者が白人キリスト教イデオロギーの批判的視座を見出すのも，セジウィックとフラーの前掲著作の内部に他ならない。

かくして本書で我々が目にするのは，これまで以上に色彩豊かなアメリカン・フロンティア研究の風景。紆余曲折をへて，いままたアメリカ研究の重要テーマとなりつつあるフロンティアの再考にむけて，多くの刺激的な論点を提供してくれる本書の刊行を心から喜びたい。

川本　徹（日本学術振興会特別研究員）

青野利彦 著

『「危機の年」の冷戦と同盟——ベルリン，キューバ，デタント 1961–63 年』

（有斐閣，2012 年，3,990 円）

本書は，1960 年代初頭のケネディ政権期に生じた二つの国際危機，ベルリン危機とキューバ危機におけるアメリカ外交の展開を，米ソ二大国関係と西側同盟政治の交錯の視点から描く実証的外交史研究である。先行研究との比較でいえば，本書は西側同盟内政治の展開により多くの注意を払い，一見米ソ二大国が一方的な行動をとった事例と解釈されがちな二つの危機において，ケネディ政権の対ソ政策の検討（選択肢の幅，交渉のタイミング・ペース）がいかに同盟諸国への配慮によって拘束されていたかを明快に論じている。ベルリンとキューバという相互に連関する二つの危機は，米ソの戦略関係を決定的に悪化させる可能性を秘めた危機であったと同時に，両危機への対応を巡ってケネディ政権が，イギリス政府と連携を図りつつも，対ソ政策に関して見解を違える仏・西独と NATO 小国の狭間で結束維持に苦心した同盟管理上の危機でもあったというのが本書の主張である。同盟の危機が叫ばれるほど関係が緊迫したのは，二つの危機それ自体が世界大の紛争（核戦争）を惹起する可能性を持ち，片方の問題への対処の失敗が即他方の問題の悪化につながる連動性を有していたことにとどまらない。著者によれば，両危機が米ソのみならず西欧同盟諸国にとっても死活的に重要な 5 つの「ドイツをめぐる諸問題」（ドイツ統一，ベルリン，核不拡散，東西不可侵協定，核実験禁止）と常に関連していたからでもあった。この二つの国際危機とその基底に横たわる 5 つの争点の相互作用の展開を本書は丹念に描き出し，随所で先行研究の議論に対する精緻な解釈の修正を提示している。

秀逸な同盟研究の本書で，特に興味深かった点を二点紹介したい。第一は，著者の指摘する二重の信頼性（「同盟防衛の信頼性」と「危機不拡大の信頼性」）の問題である。冷戦期全体を通して，戦後歴代米政権は同盟国から見たアメリカの信頼性の維持に腐心した。二つの大危機に直面したケネディはまさに同盟国の防衛に関するアメリカの信頼性の維持にひときわ努めなければならなかったことは容易に理解できるが，同時に軍事的エスカレーションに伴う同盟国の離反を防ぐために，「危機不拡大の信頼性」の維持にも細心の注意を払っていたとの指摘は興味深い。決然たる対抗姿勢と危機の亢進回避の両立が，危機時代の外交の要諦なのであろう。

第二に本書は，米ソの相互不信とともに，西側同盟諸国による反対がキューバ危機後の米ソの包括的な関係改善を阻害した主要因であったことを明らかにしている。従来の冷戦史研究は，どちらかといえば西側同盟諸国がいかにアメリカの過剰反応を抑制し，冷戦の緊張緩和を推進してきたかを論じてきたのに対し，本書は，仏・西独や NATO 小国の反対がキューバ危機後の「1963 年デタント」の発展に「ブレーキ」をかけ，米ソ協調が上記 5 つの争点のうち部分的核実験禁止条約の締結のみにとどまった経緯を実に明瞭に論じている。

なお，本書は 2013 年アメリカ学会清水博賞受賞作である。ご一読をお薦めしたい。

水本義彦（獨協大学）

神田外語大学アメリカ研究会 訳

『アメリカのエスニシティー人種的融和を目指す多民族国家』（アダルベルト・アギーレ・ジュニア，ジョナサン・H・ターナー著）

（明石書店，2013 年，5,040 円）

本書はアメリカ合衆国内の人種・エスニック集団が直面する問題とその背景について分析したアルベルト・アギーレ・ジュニアとジョナサン・ターナーによる研究入門書の第 5 版の訳書である。10 章からなる本書は，エスニシティとエスニック関係を論じるための基礎的概念と用語，そして既存の理論を解説した章（第 1 章，第 2 章）と，各集団の現状を解説した章から成っている（第 3 章から第 10 章）。

本書の大きな特徴はエスニック関係に関する既存の理論の主張をまとめ，エスニック集団を取り巻く差別の実態を，法制度，経済，政治，教育，住居といった共通の社会的指標を用いて客観的に分析している点である。本書は多くの数的データを用いて統一された分析枠組から各エスニック集団の考察を行ったことで，白人系エスニック・グループ（第 4 章），アフリカ系アメリカ人（第 5 章），先住アメリカ人（第 6 章），ラティーノ（第 7 章）といった，個々のエスニック集団の歴史やアメリカ国内における社会的な位置付けを体系的にまとめることに見事に成功している。こうした分析は集団間の相違点を浮き彫りにし，各集団を取り巻く社会的状況の比較を容易にする。この点で本書は研究や知識の整理の大きな手助けとなるだろう。

今回の改訂では，従来のアジア系アメリカ人の論考に太平洋諸島系が大きく加えられた（第 8 章）。太平洋諸島系はこれまでアジア系と統計が一括りにされてきたが，最近その一部が分離されたことに本書は鋭く反応し，この集団のみに注目した追跡調査が行われている。先住ハワイ人，サモア系，グアム系を始めとする太平洋諸島系は人口こそ少ないが，彼らへの差別の歴史と現代における問題は，本書で扱われているように今後さらに注目されていくべき事柄だろう。

さらに新たに加えられたアラブ系アメリカ人についての分析はとても興味深い（第 9 章）。9.11 同時多発テロ事件までアジア系アメリカ人の一部として曖昧な位置付けにされがちであったアラブ系アメリカ人だが，事件を境にヘイト・クライムの対象となったことで，皮肉にもアメリカ社会において急速に可視的な存在となった。アラブ系アメリカ人とは誰なのか，アメリカでどのような状況に直面しているのか，アラブ系アメリカ人に対する関心が高まっている今日だからこそ彼らに焦点を当て，現在彼らを取り巻く状況を詳細に，かつ簡潔にまとめている本書はますます重要である。

本書は既に実用的な教科書として合衆国で多く利用されており，その面においても有益だろう。巻末には充実した用語解説集とアメリカのエスニシティ研究に関する基礎的な参考文献が多く掲載されており，書中に紹介された本書のウェブサイトも学習の大きな手助けとなる。

このように理論から現代的な問題までを扱った本書は，学部学生から研究者までを含む幅広い層の興味に応える内容となっており，アメリカの人種・エスニシティに関心がある者にとって必携の一冊となるだろう。

上田貴和子（一橋大学大学院）

和泉真澄 訳

『カナダへ渡った広島移民――移住の始まりから真珠湾攻撃前夜まで』

（明石書店，2012 年，4,200 円）

本書は，広島移民を両親に持つ日系カナダ人二世の著者が，1983 年の初の日本訪問をきっかけに，幼少期にバンクーバーで見た自信に満ちた日本人移民が生きた日系コミュニティを調査した研究書である。広島移民およびその子孫にインタビューを行い，「地域アイデンティティが個人の行動とコミュニティ形成に，どのような影響を与えるか」を明らかにしようとしている。

第一章「ふるさと，広島」では，広島県の歴史的，経済的，社会的背景を述べ，広島県から多くの移民が送りだされた理由を示している。明治政府の近代化政策の下，農民や漁民の生活基盤が崩れるなかで，江戸時代から他の地域に働きに出る習慣を持っていた広島県の人びとは海外に働きに行くことを「次のステップ」として受け入れたと著者は説明する。また，海外からの送金が移民を出稼ぎに引き付けたプル要因となったとされる。第二章「初期の移民たち」では，移民会社を通して契約労働者として移民した広島県出身者たちの経験が紹介されている。仕事を求めてシアトルやポートランドなどから国境を越えて移住する労働者の例が興味深い。第三章「出稼ぎとその後」では，移住先でも同郷のネットワークが根付いていたことが示されている。第四章「女性の到来」では，移住した多くの女性は教育程度が高く，独立心が強いため，日本の封建的な制度を逃れようとして「アメリカと結婚する」という強い信念を持っていたことが指摘されている。しかし，移住後，彼女たちは生活のために厳しい労働や孤独に耐えなければならなかった。今まで顧みられることが少なかった彼女たちの声を拾い上げた点は特筆に値する。第五章「農業者たち」では，家族全員で農業に従事し，組織を作って排日に対処し，農業コミュニティでリーダーシップを発揮する移民の姿が詳細に述べられている。第六章「分裂する都市コミュニティ」では，日系コミュニティを構成した多様な職種の中で多数を占めた労働者の運動や労使の対立が詳細に記され，日系コミュニティが一枚岩ではなかったことがわかる。第七章「二世世代」および結章で，一世が二世に日本の伝統や文化に誇りを持たせることで差別に対抗させようとしたが，一世の伝える「日本」は彼らが実際に体験したものではなく，彼らが夢見た想像の産物であるという指摘は大変興味深い。二世は一世が大きな影響力を持つ日系コミュニティと白人中心のカナダ社会との間で苦悩することになったが，これらの指摘はインタビューだけでなく，日系二世である著者自身の育った環境への観察や経験に裏打ちされたものであろう。

以上，本書は多くの広島移民及びその子どもへのインタビューや一次史料に基づき，多様な立場や語りを示している。著者はインタビューの難しさを認めつつも，一つの視点に偏らず，日系コミュニティを生き生きと描いている。出身地の影響だけでなく，移住地であるカナダ社会での経験やその影響などから広島移民の多様性が明らかにされている。こうした点にも，著者の緻密な研究の成果が反映されているのではないか。

増田直子（日本女子大学・非）

2013 年度アメリカ学会年次大会分科会報告

於：東京外国語大学
2013 年 6 月 1 日，2 日

アメリカ政治分科会

アメリカ政治分科会は「転換期のアメリカ政治」というテーマで，明治大学の清原聖子会員，南山大学の山岸敬和会員の報告を受け，議論を行なった。

清原会員は「2012 年アメリカ大統領選におけるメディア・インターネット戦略」と題する報告の中で，2008 年と比較して見えてくるものを分析した。有権者への情報伝達という点では未だテレビが主であり，インターネットは補完的なものであることを確認し，その上でスマートフォンの利用増と並行してインターネットの利用方法に変化が現れたことを明らかにした。ツイッターやフェイスブックを使用した選挙運動が，候補者や政党のみならず様々な団体，個人を通して行われたとともに，マイクロターゲティングの手法がより洗練されたと指摘した。

山岸会員は，「「オバマケア」と転換期のアメリカ」報告において，オバマによって強力に推進された医療制度改革の，多様なプログラムの中身とそれぞれの実施予定年を分析することで，一般に言われている無保険者の削減と医療関連支出の拡大幅抑制のみならず，改革法に対する支持を固めたうえで漸次負担増とするねらいを指摘した。一方，連邦最高裁判事のオバマケアに対する評価は，それぞれの判事の政治的傾向とほぼ一致しており，この先も問い直しや修正の流れが続くと論じた。

以上の報告に対して，清原会員にはツイッターとそれ以外の SNS の質や役割の違い，プライバシーの管理問題などの質問が寄せられた。また山岸会員にはメディケイド拡大にあたって新たに付けくわえられるサービスや，最高裁判決の中身についてなど，具体的な質問が相次いだ。

細かい事象を丹念に拾い上げ解釈を加えることの研究上の価値が示されたとともに，多様な解釈可能性を引き出す興味深い分科会となった。（平体由美）

経済・経済史分科会

小山久美子会員（長崎大学）から「アメリカ貿易政策史――貿易障壁としての食品安全基準に焦点をあてて」とのテーマで報告をいただいたうえで討議をおこなった。以下は小山氏による要旨である。

アメリカ貿易政策史研究といえば，関税を扱ったものが，国内外を問わず（これまでの報告者の研究も含め）ほとんどであったが，本報告は，関税ではなく，近年重要性が増している新しい非関税障壁の一つ，食品安全事項を考察した。加えて報告の特徴は，アメリカ貿易政策史研究に，食品安全政策という社会政策の新視点を取り入れ，両者の融合を試みた点にある。

第二次大戦後，GATT（現在は WTO）体制下で，工業製品の関税は大幅に削減されてきたため，近年は問題とされる貿易障壁の中身が変化し，新障壁の一つとして，各国間で食品安全の基準に違いがあることが障壁とみなされるようになった。

今や貿易障壁の問題の考察には，食品安全といった，政府の社会政策の分析なくして，またグローバルな視点なくしては，その考察が難しくなっている。

現在，世界は貿易自由化推進のため，食品安全基準の調和化を図る方向へ向かっており，グローバルレベルで注目されている食品安全システムとしてハサップ（Hazard Analysis and Critical Control Point: HACCP，危害分析重要管理点）がある。

ハサップはアメリカで 1960 年代末に誕生し，大きな食品事故の度に特に連邦政府から注目され，発展していった。発展は，連邦政府の食肉検査と密接な関連性を持ち，1990 年代後半には検査改革が実現化し，業界へのハサップの段階的義務付けが行われた。実施が可能になったのは，当時連邦政府の見解を食肉業界，市民団体が支持したからであり，このことは主に議会公聴会史料から明らかとなった。

近年の国際貿易体制におけるハサップ重視の流れは，アメリカだけの影響とはいえまいが，アメリカでハサップが発展，導入されていった社会政策の歴史的動向から大きく影響を受けたことは間違いない。（名和洋人）

アメリカ女性史・ジェンダー研究分科会

アメリカ女性史・ジェンダー研究分科会では，森川智成氏が「9.11 における女性の表象」と題する研究報告を行った。9.11 をめぐっては，その直後から現在に至るまで数多くの表象が生み出されてきた。映画，小説，ファッション，政治などのさまざまな領域において，「自由」や「民主主義」を表象するアメリカのイメージが要請され，消防隊員に代表される数多くの「英雄」達が生み出されていった。その中で，女性達はどのように表象されてきたのか，そしてどのようにその表象を生きたのかを明らかにすることによって，9.11 における女性の表象の意味を読み解いていくことが，本報告の目的であった。報告ではまず，9.11 はジェンダー・ニュートラルな出来事であったにもかかわらず，男が書いて男が記憶されるという事態が生じていたことを，映画や消防隊員像の建立が検討された際のエピソードなどを例に示した。そして，9.11 の表象において女性が抑圧されてきたことに対してアメリカのフェミニズムは何の応答もしていないことを指摘した上で，それではフェミニズムは 9.11 の表象における女性の抑圧という事態に対して一体どのような応答が可能であるかという問いを，女性の行為能力という点から検討した。その際に分析対象として用いられたのが，2011 年の『People』誌の特集記事の写真や，世界貿易センター跡地において瓦礫撤去と解体作業を取材した

ジャーナリストの本であった。そこから報告者は，9.11 後の社会規範の下で未だ女性がその存在を隠蔽され，その表象が問題含みのものであるならば，それに対するひとつの応答の在り方として，女性の行為能力を戦略的に読み取っていくことの必要性を指摘した。報告後，フロアからは資料の出典や分析手法，解釈などをめぐって数多くの質問やコメントが寄せられ，活発な議論が行われた。（小野直子）

アメリカ国際関係史分科会

本分科会は，W. LaFeber による「冷戦史」の訳書（『アメリカ VS ロシア冷戦時代とその遺産』［芦書房，2012 年］の書評会として開催した。まず評者として青野利彦氏（一橋大学）から問題提起を，次に，監訳者の平田雅己（名古屋市立大学）・伊藤裕子（亜細亜大学）の両氏からコメントをいただいた。

評者の青野氏は，本書の冷戦史・アメリカ外交史像の特徴として，①W. A. Williams の批判的視座や分析手法を引き継ぎつつも，単純な「経済決定論」ではなく政策決定者の個性や国内政治要因，地政学的要因も重視し，国内政治状況，国際状況がもたらす拘束要因にも着眼している（M. Hunt 等，「イデオロギー」に着目する近年の研究との親和性。国際システムとの相互作用の視点はポスト修正主義以降の研究の進展を反映），②多国間・複数アクター間の「国際関係史」としての冷戦史というよりは，アメリカ政治外交史，アメリカと世界の関わりに主たる焦点が置かれている，点にあると評価した。そして，教育上における日本での刊行の意義として，歴史解釈の「多様性」の感覚を身につけ，冷戦史像に関し Gaddis や Ikenberry らの著作と比較して議論する上で，また米主導の国際秩序の中で安全を確保し経済的に繁栄した戦後日本史の評価を考ええる上でも本書が有益だとした。

次いで，平田氏から，修正主義研究の重要な功績の一つは冷戦史研究に民衆の視点を提示した点にあり *People's History of the Cold War* という民衆視座の啓蒙書が，また地域視座の冷戦通史，例えば日本固有の視点からの *Japan's Cold War* といった啓蒙書への期待が語られ，そして伊藤氏からは，冷戦史研究での本書の重要な貢献は認めるが，米ソ（ロ）中心の展開となっていることは否めず，例えばヨーロッパ人の語る冷戦史は LaFeber とは力点や歴史の展開も異なり，多様な立場からの冷戦史をふまえることでより包括的な理解が可能になるとの指摘があった。

本分科会には 22 名の参加者があり，上記の問題提起をうけて有益な議論が行われた。（藤本　博）

日米関係分科会

日米関係分科会では，土屋大洋会員（慶應義塾大学）によって，「英米の植民地主義と太平洋海底ケーブル」の報告がなされた。報告の趣旨は，つぎのようなものである。1881 年に，独立王国であったハワイのカラカウア王が来日し，天皇と会談をもった。このとき，王は，日本とハワイのあいだに，海底ケーブルを敷設するよう提案した。なぜなら，当時のハワイは，米国による併合の危機に直面しており，カラカウア王は，米国への対抗という観点から，日本とのパイプを太くしようと考えたのだ。だが，王の存命中に，この提案は，実現されることはなかった。海底ケーブルの敷設が実現されるのは，王の死去後の 1903 年のことであり，ハワイが米国に併合されたあとのことであった。ここで注目したいのは，はじめに，ハワイを経由して，太平洋に海底ケーブルを敷設しようとしたのが，大英帝国であったという点である。当時の大英帝国は，世界の海底ケーブルの 6 割以上を支配するほどの勢力を有していた。今回の報告では，どうして，大英帝国の「全赤線」とよばれる，グローバルな海底ケーブルにハワイが接続できずに，米国のものとなったのが詳細に検証された。

報告の順序としては，まず，ハワイをめぐる太平洋ケーブルの敷設競争が，英米の植民地主義のなかで，象徴的な位置づけを有しているとの認識が提示された。そして，日本，大英帝国，米国からみた太平洋ケーブルについての検討がなされた。そこでは，米国が，スペインからフィリピンとグアムを獲得したことが，太平洋ケーブル施設に影響したとの見解が示された。そして，ハワイからの視点が提示されたのちに，日米関係における太平洋ケーブルの意味が浮き彫りにされた。

なお，土屋会員の報告に対しては，討論者であるライティング・アンド・ブレインの大野哲弥氏（非会員）から，多くの有益なコメントがなされた。さらに，フロアからは，さまざまな学問領域からの質問がだされるとともに，活発な意見交換がおこなわれた。（浅野一弘）

アメリカ先住民研究分科会

今年度の本分科会では，立命館大学の宮下敬志氏が「19 世紀末アメリカ先住民教育政策史―その研究史と現在的課題について」と題して報告を行った。報告では，19 世紀末米国先住民教育政策・学校教育に関する 1980 年代以降の研究の流れが概説された上で，これまでの研究では使用されてきた史資料や方法論に偏りのあること，また導き出される結論に深化が見られないことが問題点として指摘された。その上で宮下氏は，先住民教育政策史研究におけるこうした課題を克服する方策について，「“世界史”としての米国先住民教育史は論じられ得るのか？」という問いを軸に据え，自身のこれまでの研究を材料にしながら具体的に次の 3 つの手法を提示した。まず第一に，先住民「改革」推進者の人的交流関係を論拠として，19 世紀末の先住民「改革」をアメリカの人種マイノリティ「改革」運動の文脈で論じる手法が紹介された。第二に，手作業教育を中心とし，かつ軍事教練や軍隊式行進が取り入れられた規律重視のカリキュラムをもつ米国先住民教育の特殊性に着目し，その教育実践が歴史的・世界史的にどのような影響関係にあったのかを分析する手法が提示された。最後に 19 世紀末，ハンプトン校，カーライル校といったインディアン学校が，「文明化」した先住民を「変身技法」を用いて社会に呈示した事例研究を通して，先住民教育手法の転用過程の分析が紹介された。

戦略的で緻密な史料研究によって裏打ちされた報告の後には，フロアからの問いをもとに人種マイノリティ教育の国家間比較研究の可能性について，人種マイノリティ教育における職業訓練と人文教育の棲み分けについて，教育における「文明化」の呈示と博物館における「野蛮」の呈示の関係性について，人種マイノリティ教育政策の思想的基盤となっ

ている人類発展段階説と混血の問題の関わりについて討論が行われた。（川浦佐知子）

初期アメリカ分科会

報告者：John L. Brooke（Ohio State University）報告：*Columbia Rising*: Thoughts on Public Sphere and the State in the Early American Republic（「共和国初期における公共圏と国家：*Columbia Rising* 執筆を踏まえて」）討論者：肥後本芳男（同志社大学），橋川健竜（東京大学初期アメリカ分科会は本年度より，取り上げる時期を 19 世紀前半まで広げることにしている。今回はオハイオ州立大学のジョン・ブルック教授を迎えて，ユルゲン・ハーバーマスが提起した「公共圏」概念を共和国初期研究に援用する意味について，報告をいただいた。ブルック教授の報告は，実証的な議論の中に公共圏概念の検討を含めた大著，*Columbia Rising: Civil Life on the Upper Hudson from the Revolution to the Age of Jackson*（Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2010）の執筆経験を踏まえた内容であった。リヴィングストン家が大土地所有者として君臨し，領主制を敷いていた 19 世紀前半までのニューヨーク州コロンビア・カウンティでは，カウンティ内の地域によっては公論が論じられる「場」そのもの――たとえば教会，新聞，酒場など――が非常に数少なく，文字どおり公共圏が形成されにくい環境があった，という指摘は，分科会参加者の多くにとって盲点だった。その環境下でもさまざまに人脈が形成され，党派的な公論が現れたとして，ブルック教授は 18 世紀～19 世紀初めを中心に公共圏とその人脈の事例を示された。討論者の肥後本芳男（同志社大学）および橋川からは，フリーメイソンや第二次大覚醒とコロンビア・カウンティの公共圏論の関係，それらを含めた公共圏と私的領域のとらえ方についてどう考えるか，また史料が残りやすいのはフェデラリストの公論のほうと想定されるが，農村のリパブリカンの公共圏をどう描くか，などの論点が提示された。その後 18・19 世紀北部の農村における公共圏の特質について，また女性がどの程度地域の公共圏に参画したか，などについて，20 名を数えた分科会参加者と教授との間で，活発な議論が交わされた。

（橋川健竜）

アジア系アメリカ人研究分科会

アジア系アメリカ人研究分科会では，この比較的「新しいアメリカの顔」と言われる彼らに関連する広範囲の学際的研究が，個々の学究のなかで発展伸長している様子を，緩やかな枠の中で参加者と共有していただくことをベースにしております。その基本を念頭において報告者を検討していたところ，2012 年 6 月の北京での学会で，責任者（野崎）が数年ぶりにあったバークレー校のキム教授が，自分の研究室に留学する予定の松本さんに話してもらったらと…といわれ，それが実現したという過程があります。以下，報告者の報告要旨どおり，まだ経験の少ない院生に広い視野から適切なコメントやアドバイズをいただき，指導教官共々感謝いたします。（野崎京子）

本発表は，私がカリフォルニア大学バークレー校，エスニック・スタディーズへの交換留学を通じて経験し，学び，感じたことを基にしています。バークレーでの授業，講演，コミュニティーイベント，インタビュー調査などを通じて，オーラル・ヒストリーとアジア系アメリカパフォーマンスの関係性について考察しました。なお本発表は，2012 年秋学期に，エレイン・キム教授の指導のもと行った個人研究のレポートを出発点としております。その後，西海岸のアジア系アメリカコミュニティーで活躍する三人のアーティストへのインタビューを行うなどの調査を行いました。アジア系アメリカ研究は今日，文学だけでなく歴史，社会，政治，文化など様々な分野に渡っています。アジア系アメリカ研究分科会においても，そのような背景を反映してか，様々な分野の研究者の方々と問題意識を共有し，意見を交換することができたのではないかと思います。私に発表の機会をいただき，今回の研究調査にご協力いたくなど，貴重なご意見を下さった方々に，心からの謝意を表したいと思います。（松本ユキ）

文化・芸術史分科会報告

ここ最近の分科会ではずっと「展示」に関連する問題について報告を行ってもらっているが，今回の分科会でもその一環で，江崎聡子氏（青山学院女子短期大学・講）に「ユートピアのレトリック――1939 年ニューヨーク万博とアールデコ」というタイトルで万博という展示装置に関する発表を行ってもらった。万博の記録ビデオやマックス・フライシャーによる万博宣伝用のアニメーションなどもあいだに挟みながら多角的に語られた江崎氏の報告によると，1939 年にニューヨーク市で開催されたニューヨーク万博において，アールデコ様式は万博のコンセプトであった科学と技術によって実現される民主主義や消費文化といったものを表現し，アメリカを一つのユートピアとして語るための視覚言語として用いられたという。つまり，このデザイン様式は，マシーンエイジの文化的背景，テクノロジーによるユートピア主義思想，そして生産様式および視覚的類似性両方における機械との親和性といった要因から，アメリカを大衆消費社会によって実現される民主主義のユートピアとして賛美するための視覚言語として機能することを期待されていたわけである。発表のなかでは，ヨーロッパで誕生したこの装飾様式がどのようにアメリカに浸透し，そしてどのように当時の「未来」や「ユートピア」といった概念と結びつき，なぜこれらの概念を表象するレトリックになったのか，また二十世紀前半のアメリカにおける視覚文化の文脈において，アールデコ様式がテクノロジー崇拝主義やユートピア，そして未来のイメージといったものとどのような関係を結んでいたのか，といった問いに関して具体的な事例を挙げながら考察がなされた。報告後の質疑応答も刺激的で大変充実した分科会となった。今後も継続的に分科会を開催し，アメリカ学会における文化・芸術分野の拡充に寄与したいと考える。（小林　剛）

ご寄付のお知らせ

先日逝去なされました有賀貞先生，五十嵐武先生のご遺族からアメリカ学会宛にご寄付を承りました。常務理事会では両先生の御遺志を思い，それらのご寄付を斎藤眞賞基金へ組み入れることに決定いたしましたので，深く感謝の意を表しつつ，ご報告申し上げます。

アメリカ学会常務理事会

訂正のお知らせ

ニュースレター 182 号 6 頁
誤 「第 18 回清水賞の対象は，2013 年 1 月 1 日より同年 12 月 31 日までに出版された研究書」
正 「第 18 回清水賞の対象は，2012 年 1 月 1 日より同年 12 月 31 日まで出版された研究書」
上記につきまして，訂正しお詫び申し上げます。

アメリカ学会事務局の移転について

アメリカ学会の事務所を以下のとおり移転いたしましたのでお知らせいたします。
新住所　〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502　学協サポートセンター内　アメリカ学会
Tel: 045-671-1525　Fax: 045-671-1935
e-mail: office@jaas.gr.jp，年報は nenpo@jaas.gr.jp，英文ジャーナルは enjournal@jaas.gr.jp

常務理事会

新入会員

目黒志帆美	東北大学	史　米　衆
上田貴和子	一橋大学	史　社　米
伊 佐 由 貴	一橋大学	史　米　民
高田とも子	九州大学	文　史　社
CAMPBELL. Gavin James	同志社大学	史　宗　外
浅 野 豊 美	中京大学	外　米
佐々木悠介	法政大学（兼任講師）	芸　文
塚 本 江 美	豊田市国際交流協会	地域・文化
北 田 依 利	東京大学（院）	歴　地
中 村 仁 美	聖マリア女学院中学・高等学校　非常勤	米　歴
山 田 優 理		歴　衆
アンドレア・リブジー	リバプール大学（院）	
宮 城 幹 夫	国際基督教大学（院）	宗　歴
高 瀬 佑 子	静岡大学　特任助教	文　社
飯田遼太郎	東京大学　特任助教	政　外
石 川 葉 菜	東京大学（院）	政　歴
山 辺 省 太	関東学院大学	文　思想・哲学
大西雄一郎	マンハッタン大学	歴

編　集　後　記

ケネディ大統領暗殺 50 周年の 11 月，キャロライン・ケネディ氏が駐日大使として来日した。政府閉鎖，皆保険と，合衆国の二極分化はとどまるところなしの状況だが，合衆国民にとってのケネディ神話の象徴的な意味は総じて一致しているようであり，幼き日のスイート・キャロラインの姿も再三メディアに登場している。50 年を経て，陰謀説や冷戦期の大統領としての JFK の功績を再検証する向きもあるが，冷戦期が遠い過去のものとなり，世界の地勢図が確実に変化したことを実感しつつ，まずは極東の地でキャロライン氏の 50 年後に注目したい。

（戸谷）

2013 年 12 月 5 日　発行
アメリカ学会
〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502
学協会サポートセンター内
Tel: 045-671-1525　Fax: 045-671-1935
http://www.jaas.gr.jp
発行人　古矢　旬
編集人　庄司啓一
印刷所　啓文堂松本印刷
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12